

実務ワークショップ報告

平成 25 年度実務ワークショップ 「カルチャーコレクションの CBD への取り組み方」

日本微生物資源学会実務担当小委員会

永井利郎

(独立行政法人農業生物資源研究所遺伝資源センター (MAFF))

坂本光央

(独立行政法人理化学研究所バイオリソースセンター (JCM))

伴さやか

(独立行政法人製品評価技術基盤機構バイオテクノロジー本部 (NBRC))

林 将大

(岐阜大学大学院医学系研究科病原微生物遺伝子資源保存センター (GTC))

森 史

(独立行政法人国立環境研究所微生物系統保存施設 (NIES))

実務ワークショップの前身である実務担当者会議では、1998 年第 5 回 JSCC 大会時に「カルチャーコレクション (CC) と生物多様性条約 (CBD)」というテーマで CBD の話題を取り上げた。その時は 4 名の方に以下のタイトルで話題提供をして頂いた [以下、敬称略。参考：MCC, 14, 63 (1998)]. 「生物多様性条約 (CBD) がカルチャーコレクション (CC) 活動に及ぼす影響と問題点・波多野和徳 (IFO)」「アジア地域における Biodiversity Information Facility・志村純子 (JCM)」「アジア地域における微生物研究ネットワーク」プロジェクト—国際微生物共同研究の一例として—・鈴木健一朗 (JCM)」「21 世紀へ向けてのカルチャーコレクション運営・安藤勝彦 (協和発酵工業)」。なお所属は当時のもので、すでに第一線を退かれた方もおり、歴史が感じられる。次にテーマとして取り上げたのが、2002 年第 9 回大会の折で「生物多様性条約と Biological Material Transfer に関するワークショップ」という企画であったが、残念ながら講演内容の記録は残っていない。

最後の企画から 11 年が経ち、2010 年に名古屋議定書が COP10 で採択され (発効は確定的とのこと)、2012 年 12 月には当学会協賛で「バイオリソースセンターの遺伝資源管理に対する名古屋議定書の影響」(主催 NITE) をテーマに国際シンポジウムが開かれた。カルチャーコレクションで他国の遺伝資源の導入に関してのマネジメントが厳密に行われる必要がある状況の下、実務ワークショップで CBD 及び名古屋議定書に関するテーマを取り上げるのは必然であろう。そこで、これらの概要と、カルチャーコレクションや大学での個別的な取り組み・対応について、以下の 3 名の先生方にご講演を依頼した。時間が短く、駆け足での講演となったことは反省すべき点であるが、活発な討議が行われ、非常に盛況であった。講演の詳細は後続の解説に譲るとして、ここで一点記録したいのは、CBD に対する機関・政府の対応はいかにして外国、特に発展途上国から生物資源を日本に導入するのに注力されてきたが、逆に日本の生物資源は外国からのアクセスに対してフリーの状態となっており、それは国益を考えると非常によろしくない、という指摘がなされたことである。亜寒帯から亜熱帯に渡り南北に長く伸びる日本では、他国に劣らない生



左より、安藤勝彦先生 (NBRC)、伊藤 隆先生 (JCM)、鈴木睦昭先生 (NIG)

物資源の多様性があり、それゆえ我が国の生物資源の保護は今後大きな課題となるであろう。

外国産生物資源の探索・収集においては、各国の国内法遵守が求められるが、それら法的情報へのアクセスがしにくいのが現状であり、次に本ワークショップで CBD についての話題を取り上げる時までには、今よりもっと多くの研究者・開発者がより簡単に他国の生物資源にアクセスできるようになっていることを期待するばかりである。最後に快くご講演を引き受けてくださった先生方、そして本ワークショップに参加された皆様に厚く御礼申し上げたい。

概要

大会名：日本微生物資源学会第 20 回大会

日 時：2013 年 6 月 27 日 9：40-11：00

場 所：茨城県つくば市・つくば国際会議場中ホール 200

9：45-10：10 演題 1：CBD と名古屋議定書の概要

安藤勝彦 (NBRC)

10：10-10：35 演題 2：コレクションにおける CBD・名古屋議定書への対応について

伊藤 隆 (JCM)

10：35-11：00 演題 3：学術研究における ABS 対応の課題

鈴木睦昭 (NIG)

(敬称略)